

第14号
平成元年
1989

会報

にしきうら



高知県立須崎工業高等学校同窓会

目 次

平成三年の母校創立五十周年を

心を合せてお祝いしよう	同窓会会長 清 家 寛	1
ご挨拶	学校長 森 岡 清	2
学校近況	教 頭 森 峯 雄	3
進路状況の中間報告	進路指導部長 中 山 正 彦	4
退職のご挨拶	合 田 正 寛	5
(関東支部だより) 山梨県上野原町	青 木 三 郎	6
(大阪支部だより) 須工同窓会大阪支部 幹事会の思い出	竹 下 哲 男	6
(高知支部だより) 日本電気技術者協会々長表彰受賞雑感	加 藤 美 代 治	7
平成元年度開校記念日の行事	事 務 局	8
空手道部活動報告・元年総体出場	監 督 井 上 日 出 男	9
	コ ー チ 中 野 達 也	
ヨット部の活動について	顧 問 小 松 茂 久	10
	矢 野 修 一	
事務局だより 事務局長辞任のご挨拶	旧事務局長 島 崎 良 一	11
ご挨拶	新事務局長 武 森 幸 利	
旧校地跡記念碑の建立に際して		12
住所変更		13
昭和63年度決算報告		14
平成元年度予算		14
終身会費納入者名追加分		15
消息不明者		16
会 則		
各種証明書の発行について		
編 集 後 記		

表紙の写真は、電気科、川西先生にお願いしたもので、旧校地跡記念碑
(平成元年4月完成)です。(須崎市札町寺尾児童公園北堤中央)



平成三年の母校創立五十周年を 心を合わせてお祝いしよう

昭和18年機械二種卒業

同窓会会長 清 家 寛

同窓会の皆様にはお元気に御活躍のことと、およろこび申し上げます。

お蔭さまで、会報14号が刊行されました。紙上を借りてご挨拶申し上げますと共に、本部事務局の諸先生方並に御寄稿下さった方々に対し、深く感謝と御礼を申し上げます。

光陰矢の如しと申しますが、一年は瞬時に過ぎてしまいます。皆様も御承知の通り、母校は平成三年に、創立五十周年を迎えます。

昨年会報で御案内申し上げました通り、同窓会としましては、母校の記念事業に協賛して次の計画を推進しております。

- 1、同窓会名簿の発行
- 2、校旗を新調して母校に進呈
- 3、旧校舍跡地に記念の建立
- 4、その他

右計画の中で、(3)の旧校舍跡地記念碑の建立については、諸般の状況により本年三月工事に着手、去る五月二十七日、開校記念日の吉日を選んで除幕式を挙行いたしました。

記念碑の建立場所は、

札幌の元旧校舍機械工場の一隅、「現寺尾公園北堤中央」に、本会報表紙写真の通り「自然石

に揮毫」して立派に建立されました。除幕式は、

戸田須崎市長様、松岡須崎商工会会頭様はじめ、地元有志の方々、母校の先生方、後輩の学生代表、同窓会の役員並に有志等、多数の方々の御列席のもと盛大に行われました。

会員の皆様には、どうか折にふれて現地をお尋ね下さい。

この記念碑建立につきましては、同窓各位の数々の誠心と、努力が秘められております。このことにつきましては、後日詳述されることと思っております。

この記念碑は、
糺の地に学んだ者や、往時を知る者は勿論、移転後の本校にとりまして、歴史の一端を末永くとどめるものとなります。

建立に御盡力下さいました、数々の方々に対し、同窓会を代表して、衷心より感謝と御礼を申し上げます。

次に去る六月十七日の本部理事会に於きまして、来年八月「本部総会」を行うことが決まりました。母校創立五十周年を控えての総会ですので、会員の皆様には万障お繰合せ、お集り下さい。

久々の総会でもありますので、大いに語り合い杯を交して旧交を暖めましょう。そして記念事業に心を合わせて参加し、お祝い出来るよう、準備を進めてゆきたいと思っております。

来年の総会は、

別紙で案内の通り「平成二年八月十一日」と決定しました。

会員の皆様には、それらの御都合もあられることと思っておりますが、何卒お繰合せ下さって、お誘い合せの上、沢山お集り下さるよう、お願いいたします。最後になりましたが、母校の御発展と、会員皆様の益々の御健康、ご活躍を心からお祈り申し上げます。挨拶といたします。



コンピュータ室全景 (昭和63年度完成)



ご挨拶

昭和26年機械卒業
学校長 森岡 清

九月も半ばになりましたが、まだ残暑の厳しい毎日が続いております。

同窓会の皆様方におかれましては、お元気で忙しい毎日をお過ごしのことと存じます。

この所、産業界も過去数年間とは異なり、大変な活況で、学校と致しましては就職関係でこれまでにない恩恵を受けているところでございますが、企業の現場で活躍の皆様にとっては、それこそ休む間もないご多忙の毎日ではないかとお察し申し上げます。

どうか、健康には十分お気を付けられまして、活躍のほどお祈り申し上げます。

さて、この一年間、同窓会の活動を振り返つてみますと、本校同窓会も本格的な活動の時期に達してきたという感じがいたします。

それを可能にしているのは、何といつても資金源がしっかりとってきたからだと思います。高知支部を皮切りにした終身会費による同窓会基金の積み立て額が二千万円に達してからは、予算計上にゆとりがで、色々の事業が可能になったからであります。

ここに至るまでには、会員各位の絶大なご支援と各時代の事務局のご努力、そして先生方のご理解とご支援によるところが、いかに大きかったかを感じ

ます。

清家会長さんのご挨拶にもありますが、以前からの懸案事項でした旧学校跡地への記念碑の建立が、実現しましたことや、さらに校旗の新調も着々と準備が進みつつありますことは、創立五十周年を控えた今日、わが同窓会も、ようやく人生五十年といわれるにふさわしい伝統と実力を備えてきたと、感慨深いものがございます。

また、今年の当初には須崎支部の総会が、これまで空前の盛会のように開催されました。

よく、本校の同窓会は、年寄りから若い者まで、万遍なく集まるといわれます。このことも先輩方の後輩に対するお心遣いがあったのだと思ひますし、同窓の絆を大切にす本校ならではの事と存じます。

先輩方のお心遣いと申しますと、今年の卒業予定者に対する求人のご要望も数多くいただき、これもまた有難いことの一つでございます。

本校の生徒の就職に関しましては、数年前の不況時代におきまして、他校に比較しますとはるかに良い実績を誇つていまして、そのことが地域に対する大きな学校PRの一つの材料になっていきます。

須工へ進学すれば、良いところに就職できるというのが、近郊の中学生やその保護者の認識になっていまして、そうした一つの目的をもって進学してくる生徒が増加してきましたことは、学校と致しましても誠に有り難いことでございます。

学校が、地域のニーズに添った特徴を持つことは大変大きな強みでありまして、そうした意味から申

しましても、先輩方からのご求人のご要望は、特に大切にし、優先的にお応えしなければならぬと考えているところでございます。

しかしながら、それらのご要望に十分お応えできない向きもありまして申し訳ないことと存じています。どうかご寛容のうえ、今後とも引き続き宜しくお願い申し上げます。

さて、これまでにもすでに何回か申し上げたことでございますが、創立五十周年も、後二年となつてまいりました。

同窓会事務局では、来年八月には総会を行い、それまでに校旗を新調することや、二年後には記念式典と、それに合わせて同窓会名簿の作成等の計画を立て、清家会長さんを筆頭に事務局を挙げて、その準備に取り組んでいます。その中で、校旗に入れる校章の図案は、一昨年本校に導入されましたCAD (Computer Aided Design) を使用して、機械科の武森 (35 M卒) ・梅原 (54 M卒) 両教諭が図面化してくださりました。

校章については、これまで凡そこんなものというところで、縦横の比率や中央の錨の曲線の描き方などの細部は、決まったものが無かったのですが、今回は高さを「1」としたときの各部の寸法を比率で表すことで、どんな大きさのものでも相似的に拡大・縮小ができるようになりました。

工業高校ならではのところでございます。

ご報告すべきことはまだ沢山ありますが、今回はこの辺りで失礼申し上げます。

皆様方の一層のご活躍をお祈り申し上げます。



学校近況

昭和27年機械卒業
教頭 森 峯 雄

同窓会の皆様方には、お褒りなくご清祥のこととお慶び申し上げます。無事一年を経ることができまして、恒例の近況報告をさせていただきます。

今春の卒業生は、機械科七一名、造船科二九名、化学工業科二九名、電気科八〇名、計二〇九名、前年度より四四名増で、卒業生総数六七三六名（女子五二名）、工業学校分三一〇名を入れますと七〇四六名と七千名を越えました。女子生徒も、化学工業科七名、電気科一名の八名が在学中で、増加しております。今春も、ほとんど全員が希望の進路に向って巣立つことができました。諸面でのお力添えに、深くお礼申し上げます。

新入生では、全科定員を上回る、とくに、化学工業科は県立高校中最高率で、計三一〇名の志願者があり、合格者は二四二名となりました。各クラス四〇名六クラスで、定員を二名上廻りましたが、本校を志望しながら入学できない者が多数出る結果になってしまいました。

校内の雰囲気も落ち着き、次代を背負う積極的な向上が期待できる状態になってきました。昨年の機械科のMC（マシンングセンター）に続くNC（数値制御工作機械）の導入、コンピュータ室（平屋北側）と図書室（同南側）が南舎西続き、正面庭南後

方に新設されました。引続き設備も整えて、次代のリーダーを育てる気概で、先導的な躍動を求めて努力しているところです。

特活関係では、元年総体のソフトボール会場となり、積年の返礼と奉仕がてき、空手道部（個人）とヨット部が出場しました。郡体では、多数の上位成績を得ました。

人事ですが、合田正寛先生、宮崎昭夫先生が停年退職されました。合田先生は昭和二十六年から三十八年間本校造船科専一に勤務され、船体実験棟の設立、運用等では国際的な研究を、また、俳句同人会（つくし会）を長年主宰され、ほか、いろいろな文化活動を通して地域との連携疎通の面で大変お世話になり、薫陶を受けられた方々も多いと思います。宮崎先生は、美術担当で、本校では昭和五十九年から四年間勤務されましたが、サロンドパリで金賞を受賞されるなど、ご精進を活かされて個々の生徒の内面に入り、能力を引き出して自信をつけていただいたことに感謝しております。

また、植田豊年、西村孝昭、高橋泰宏、吉田悦子先生他、長年ご勤務いただいた先生方が、転勤されました。ご労苦に深く感謝し、ますますのご多幸、ご活躍を祈念して、心からお礼申し上げます。

以下人事異動をご紹介します。

〔転任〕

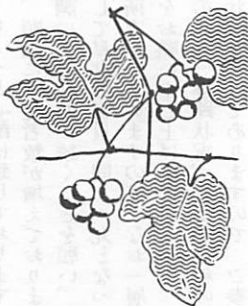
〔着任〕

- 岩貞 一矢(国)須崎高
- 高橋 卓也(社)南高
- 安並 紀子(川)窪川高
- 山崎 加恵(国)期講
- 井上 圭介(社)窪川高
- 今田 充(川)時講

- 中村 光一(数)高知工
- 川村 亜紀(英)中村高
- 塩田 泰愛(体)幡青家
- 山本 幸彦(川)窪川高
- 植田 豊年(機)東工
- 西村 孝昭(化)高知工
- 山崎智恵貴(川)中芸高
- 高橋 泰宏(電)高知工
- 吉田 悦子(養)子鹿園
- 井上 栄子(事)須崎高

以上、新進気鋭の教職員を加えまして、研鑽に努める所存ですので、ご指導ご援助をお願い申し上げます。皆様方のご発展ご多幸を切に祈念しまして、報告とさせていただきます。

- 上岡 正紀(数)追手前
- 中山 良明(英)時講
- 井上 明(体)丸の内
- 安岡 正晃(川)期講
- 平川 猛光(機)東工
- 矢野 修一(造)新採
- 味元 秀夫(化)高ろう
- 田所 靖通(川)時講
- 氏原 栄一(電)新採
- 前島 正二(川)期講
- 門田紀佐子(養)仁淀高
- 味元 清(事)宿毛高





進路状況の

中間報告

進路指導部長

(電気科教諭)

中山正彦

卒業生の皆様方には、ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

日頃は、後輩の就職等について、何かとご支援を戴きまして誠にありがとうございます。

本年度も、9月16日をもって就職試験解禁となり本校生徒も大勢の者(約180名)が受験するようになっておりますが、最近の進路状況を簡単にご報告いたします。

昭和30年代後半より40年代にかけて、高校生は「金の卵」と呼ばれた経済の高度成長期がございました。しかし、オイルショックを境に、経済成長が停滞し、高卒者への求人は年を追うごとに低下して参りました。そしてオフィス・オートメーションや、ファクシミリ・オートメーションなどによる合理化省力化、サービスの高度化に伴う高学歴者への採用移行が進み、高校生の就職環境は冬の時代を迎えたとも云われ、非常に厳しい状況にありました。

ところが、63年に入り様相は一転、円高不況を乗り切り、内需拡大を基調とする景気の回復、さらに拡大に伴い各企業とも人材採用意欲が高まり、高卒者の就職環境は急速に活気を呈して参りました。

さて、今年度の就職環境に目を移してみると、最

平成元年度 3年生進路希望状況

科別	生徒数	進学希望者	就職希望者		その他
			県内	県外	
機械	79	12	40	27	0
造船	32	3	8	21	0
化工	28(1)	1	14	13	0
電気	68	11	28	29	0
計	207	27	90	90	0
			180		

()内数字は女子

過去3年間の進路状況

年度	生徒数	進学	就職		その他
			県内	県外	
61	189	25	61	96	7
62	165	27	52	73	13
63	209	25	70	113	1

本年度並びに過去2年間の求人状況(会社数)

年度	大阪	関西	東海	関東	中・四国	県外5地域合計	県内	計
62	90	66	28	127	23	334	72	406
63	123	116	69	208	47	563	123	686
平成元年	157	159	101	306	89	812	117	929

平成元年の求人は、10月20日現在のものである。

近の円高安定、内需拡大、活発な設備投資等で昨年以上に好調であり、各企業とも求人活動が活発で、求人の出足もよく、本校ではすでに、昨年を大幅に上回る状況でございます。今年は高度成長期なみの景気を迎えとも云われ、求職者にとっては、売り手市場であつて非常に有利な状況でもございます。

ただ、今年は地元志向が特に強く、多くの生徒が県内企業への就職を希望し、受験するようになっておりますので、例年よりも厳しい状況になるのでは

なからうかと、ちょっと心配は致しておりますが、現在のところ、順調に内定者数が増えております。今後も、順調にこの状態が続くことを願い、就職率100%を目指して私共教職員一同、一丸となって頑張り努力する所存でございますので、なお一層のご指導、ご支援をお願い申し上げます。

次表に最近の求人、進路状況、および今年の三年生の進路希望状況を掲げてありますので、ご参考にさせていただきます。



退職の

ご挨拶

造船科元教諭

合田 正寛

今年春、平成元年三月三十一日付で定年退職して早くも半年が過ぎようとしている。月日の経つ速さを改めて感ずる昨今である。

昭和二十六年春、当時流行語でもあったデモ・シカ教師として初めて須崎の地に来て以来三十八年間の長きにわたり教員生活を過した事になる。

三十八年間で云えば私の人生の半分以上の歲月であり須崎は第二と云うより第一の故郷と云うべきかもしれない。

その間を恙なく過し今日を迎えられたのは先輩、同僚諸氏の温い友情、地域の方々のご指導の賜と深く感謝する次第である。

布衣の身となりて身軽や春衣

散る桜三十八年長からず

春風や吾は生涯一教師

これは退職に際しての心境を素直に句に詠んだものである。

三十八年間の思い出は尽きず、走馬灯の如く際限なく拡がり、その当時、当時の事を懐しんでいる。

糺町の旧校舎での旧き良き時代を残していた頃の生徒諸君との心からの触れ合いは今も尚続いている。

のは嬉しい事である。

校舎が火災に遭い、その焼跡の生々しい頃、講堂を板塀で四ツに仕切つての授業では隣の教室からの声がそのまゝ、聞え、次第に大きな声での授業も今から思えば懐しい事の一つである。

当時は機械科・造船科の二科で、しかも一年生時は科の別なく授業が行われ、二年生からそれぞれの科に分れての授業だったので全校が家族的な雰囲気を持った親しみのある校風であった。

生徒諸君も良く学び、須工生の誇りを持つての生活態度は実に立派であった。

放課後には各クラブが練習に汗を流し、郡体では各種目共に優勝を競う文武両道に秀でた学校であった。

その後電気通信科（現在の電気科）、化学工業科が増設され次第に大規模校へと発展して現在に至った歴史はご承知の通りである。

科の増設・定員増等に伴い、学校敷地が手狭となり移転が余儀なくされ、思い出多い糺の校舎から現地の多の郷和佐田の丘の立派な校舎へと移転したのが喜ばしい事ではあるが、旧校舎への愛情の念断ち難く複雑な心境であった。

折にふれて旧校舎跡を訪れ、親しんだ実験室等が今尚別な役割で活用されているのを見ると当時を思い出し懐しい限りである。

糺町の寺尾公園の一隅に須崎工業高校跡地として同窓会を中心として立派な記念碑が本年五月建立除幕された。

同窓生諸氏が遠近を問わず多数参列され盛大に落成を祝い当時を懐しんだ事も意義深いことである。

昭和四十七年四月、現在の新校舎へ移ると共に生徒も現代ツ子気質へと世相と共に変遷したが、どの時代にも気負い無く平常心で生徒諸君と接し続けて来た事によって心が通じ合えた事に満足している次第である。

さて私事にわたって恐縮だが現況をお知らせすると、退職の後は趣味に生き充実した日々を過ごす予定であったが、請はる、まゝ、に某銀行系列の会社に着を置き、全く未知の経済社会の中で戸惑い乍ら興味深く、楽しく過ごしている。

そして又、須崎ライオンズクラブに推薦されて入会し今迄お世話になった地域へのご恩返しが出来ればと会員諸氏と共に奉仕活動に務めている。

私が赴任した年は本校創立十周年であった。もうすぐ五十周年を迎えようとしている。この輝かしい伝統と歴史が更に向上し発展されることを祈つて止まない次第である。

今迄ご指導下さった先輩・同僚の諸氏とご協力下さいました同窓会の方々に感謝申し上げます。近況の報告と退職のご挨拶といたします。



● 関東支部だより ●

山梨県上野原町

昭和39年電気通信卒業

青木三郎

私が上京したのは、今から丁度二十五年前の昭和三十九年の東京オリンピックの年でした。

それから、世田ヶ谷上野毛の古びた木造の寮を振り出しに、府中市、日野市、昭島市、国立市と東京西部を主体にあちこち転々しましたが、現在は、山梨県の上野原町に約十年程前から腰を落ち着けております。

時々、どちらにお住みですか、? と尋ねられることがあり、山梨県上野原町です。と答えると、ええ? と一瞬怪訝な顔をする人に出くわすことが多々あります。そんな時、山梨県も神奈川県や埼玉県と同じ様に東京に隣接した県の一つであることを知らないのかと、心の中で腹を立てることがあるが、どうも山梨県は、東京では隣接する他の三県に比べて印象が薄いようである。

「会報、にしきうら」に、関東支部として何か書いてほしい、との依頼を受けたこの機会に、上野原町について、一端を紹介することにします。

上野原町は、東京の八王子市と山梨県大月市との約中間の位置にあり、周りを、関東と甲州との境界として横たわる奥多摩山系と丹波山系の山々に囲まれた人口三万人弱の小さな町です。かつては、日本のシルクロードの一役を担い、絹織物の産地として

栄えていたようですが、今では、その名残りとしての桑畑が、段々畑の中に点在するのみの本場に静かな町です。

町の南側には、山中湖に端を発し、神奈川県にて相模川と合流する桂川が流れ、夏季には、東京近郊から、太公望が押し寄せ、鮎釣りで賑わいます。夏ともなれば、新莊川で、河童同様に過した田舎育ちの小生にとつては、近くに水遊び、魚釣りのできる川のあることが、とつても嬉しく、この桂川の清流を、ひとりよがりにも上野原町の誇りの一つであると思っている次第です。

上野原町は、日本でも有数の長寿の里だそうである。町の広報の9月号では、毎年、大規模の番付表にならった長寿者番付表を作成し、発表しますが、九〇才を越した人が沢山名を連ねています。昔から、美食に走ることなく、また、山の段々畑で働く労を厭わない風土が、長寿の里を作り上げたものと言えます。

町のイベントは、何と言っても、九月四日から行なわれる牛倉神社の祭典です。神輿渡御もさることながら、神社境内に所狭しと居並ぶ露店が、威勢の良い掛け声で見物人に声をかけ、祭り気分を盛り上げます。この祭りは三日間行なわれます。

東京の住宅事情の逼迫の波は、最近、この山深い町にも押し寄せ、山を半分切り取って宅地化する大掛りな造成が進んでいます。山を崩しての宅地造成は、採算が合わないときれ、敬遠されていたようですが、最近の土木工事機械の大型化は、これを可能ならしめた様で、現在工事中の造成工事は、千六百戸

を越す大規模な工事で、見る見るうちに環境が変わっていく様に思える。

数年前までは、見ることでできた松の枝を飛びリスの姿、山鳥の親子連れは、もう見ることはなかったろう。これと言った名所、旧跡がある訳でもなく、他に誇れる景勝の地を有する訳でもない上野原町の唯一誇れる豊かな自然がどんどん減っていく。桂川の清流だけでも今のまゝであつてほしいと願う。

子供が小学生、中学生と高学年に登るにつれ、田舎の方とも段々疎遠になって来る。以前は、毎年の様に帰省していたが、ここ数年遠のいている。新莊川が、安和の浜辺が懐かしい。故郷を忘れちよつたらいかんぜよ! たまには、戻ってきいよ! 懐かしい言葉が浮ぶ。正月休みには是非帰省しようと思う。

● 大阪支部だより ●

須工同窓会大阪支部

幹事会の思い出

昭和29年造船卒業

竹下哲男

造船不況のため、昨年三月に日造船を定年前で退職し、現在は損害保険会社の代理店に就職して約一年半になります。須工を卒業後直ちに造船所に就職し三十四年間造船一筋で生きてきた私は、いざ退職となると、自分が造船の仕事以外になにもできない人間になっていることに気が付き、途方に暮れることになりました。五十才を過ぎ世間に通用する資格を

何も持たない者が再就職すると、本当に大変なことですよ。幸いにも、会社のお世話で現在の代理店に再就職ができ、再出発のため心を新に頑張っているところですよ。

さて、私は六年ほど前から須工同窓会大阪支部幹事の一員としてお手伝いをさせて頂いております。

私が幹事になったきっかけと言うのは、私が日造船で働いていた頃、先輩の楠瀬さんが当時の幹事を務めており、幹事会の当日、先輩の仕事が忙しくて幹事会に出席できないことになったため、代りに私に出席してくれないかと頼まれました。日頃お世話になって先輩の頼みとあつては仕方なく、いやいやながら出席したことを記憶しています。

何の知識もないなりに出席してみても感じたことは会長を初め諸先輩の方々、および後輩の幹事の方々、非常に熱心に、須工同窓会のことを考え、どうすれば多数の大阪支部を立派にまとめていくことができるか、という問題に真剣に取り組んでいる姿に接し頭が下る思いがしました。

当日の幹事会では、同窓会大阪支部総会の準備に関する打合せが行われ、その後も、準備のための幹事会が二、三回続いて開かれました。これらその後の幹事会にも、先輩の仕事の都合で、続いて代理出席することになり、その席上で、「同窓会総会で多くの出席者を集めるにはどうすればよいか」という件について話し合った結果、一案として、「従来のように、幹事のメンバーが大先輩の層に多く片寄った構成でなく、幅広い層にわたったものでないといけない」と言うことになり、中間層の私も是非幹事

の一員に加わるように勧められ、皆さんのお手伝いをさせて頂くことになりました。私は本来、人のお世話をすることが苦手で、しかも同窓会に關してもあまり関心がありませんでしたが、この二、三回の幹事会への出席を通じ、幹事の皆さんの熱心さに感動させられ、「おおよばず乍ら少しもお手伝いをさせて頂きます」と言うことになりました。

今迄は先輩の代理という事で気楽な気持ちで出席していましたが、いざ幹事の一員として準備に取り組むことになり、今迄自分が知らなかった「幹事さん達の仕事がいかに大変か」ということを此の度初めて知りました。例えば、会員の名簿の収集整理、新名簿の作成、会場に關する日時、場所の設定（候補会場に關する会場の広さ、交通の便についての検討費用、サービスの内容等について会場側と度々の交渉）、案内状の準備、宛名書き、発送、返信葉書きの整理、総会当日のプログラムの検討、資料の準備、会場設営の準備等、まだ、私には気が付かない会長、副会長を初め役員の方々の仕事を想うと、いかに大変であるかということが身にしみて解りました。幹事さんの方々は、皆さん昼間は、それぞれ、自分の仕事があり、その上で、これらのお世話をするわけですよ。その幹事達の中でも、幹事会資料の準備、行事の計画、立案や、度々の幹事会の場所提供、湯茶のサービス、議事録の整理、返事業書の受付整理、資料、用品の保管等を中心になってお世話のできる人が居なければ、大阪支部のような多数の会員の居る地域では総会はできません。幸いにも、大阪支部では松村さんにこの中心的な

お世話をさせて頂いております。彼にはお忙しい中、自分の仕事を犠牲にしてまでご尽力いただき、幹事一同、心から感謝しております。

この機会に改めて、会長を初め役員、幹事の方々の日頃のご尽力に対し、敬意を表し、感謝すると共に、今後も引続き、須工同窓会大阪支部のためお世話をして頂くことをお願いする次第です。

また、この会誌をご覧になった大阪支部の会員の方々が、今回の総会には一人でも多く出席して頂きますようお願いいたします。

● 高知支部だより ●

日本電気技術者協会 会長表彰受賞雑感

昭和25年機械卒業

加藤 美代治

先日、高知支部支部長竹内氏より、会報にと云うことで原稿用紙を載せましたが、さて、何を書いてよいやらと少々まよいました。思いきって会報に報告させていた、きます。

つきましては、六月八日、東京都文京区後樂園会館において開かれました日本電気技術者協会本部総会におきまして、はからずも、私こときものが、会長表彰を受賞できましたことは身にあまる光栄と存じます。

又、昭和六十一年に日本電気技術者協会四国支部長表彰を受賞いたしました。

これもひとえに、上司の方々を始め、多くの先輩の皆様ならびに友人諸公のおかげと心から感謝しております。

この場をお借りいたしまして厚くお礼申し上げます。

さて、私、昭和六十二年に四国電気工事株式会社より南海電工有限会社「四国電気工事株式会社の系列会社」へ出向しております。

特に昨今日の電気技術の進歩は越々級のスピードで発展しており、受賞に恥じない自分になれるか、否か、旧に倍して身の引きしまる思いであります。

大きな事を云うようでありますが、今後の電気技術は、日本はもはや他国を手本にできなくなっております。

これからは本当に日本が世界の一流を保つためには、独自の方法が発明されて行かなければならない時代になってきています。

したがって、これからは大型化・多様化対応に加えて、新開発、革新の電気技術を優先するのではないのでしょうか。

私も電気技術者として三十有余年、この間には、送電線の測量、鉄塔の組立及び架線、工場、ビル工事の新設電気工事、計装工事及び配電工事、又、営林署の電気主任技術者等を手掛け、電気技術の向上ならびに、電気施設、保守安全に努力して参りました。

このように、色々な経験、苦勞もありましたが、今後の日本の電気技術者を考えますと、何よりも若い技術者、つまり人材育成に的をしばって努力する

ことが重要不可決であると思っております。そのようなことから、自らの技術者のなりたての頃がよみがえってきます。

すなわち、私は若さと馬力で無我無中になった頃の事を今一度思いおこして苦笑しております。

幸い私は若い技術者との交流と云いますか接触が多いものですので、これからも後輩のために、最も重要と考えられる革新に向ってつき進む精神と、開拓への力について、自主的な取り組みを常に心に持ち、若い技術者とのコミュニケーションの中で微力の全てをつくして行きたいと考えております。

本当に皆様のお蔭で受賞できましたこと、ありがとうございます。重ねてお礼申し上げます。

今後ともご指導、ご鞭撻の程下さいますようお願いいたします。

平成元年度

開校記念日の行事

事務局

本年度の開校記念日の行事は、5月27日に行いました。

記念式は、森岡校長の式辞に続いて、例年ですと清家会長さんの記念講話になりますが、今年は会長さんに代わって、東洋園芸食品株式会社食品事業部製造担当次長、中西安男さんをお願いしました。

中西さんは、ご存じの方も多いと思いますが、本校機械科を昭和32年3月に卒業後、東洋電化工業株

式会社に入社され、その後同系の東洋園芸食品に移られ現在に至られている方です。

お話は、企業の第一線で、厳しい経済競争に打ち勝つための努力の一端を、巧みな話術をもって分かりやすく説明され、生徒たちもついつい時間を忘れて聞き入ってしまうほどでした。

特に、製品が食品で「漬物」という生物なまものだけに、その衛生管理に対する気の遣われ方は、他の産業にはない厳しさがあるといった点等、生徒にも良く理解できる所であったようでした。

また、生産工程や、生産システムの合理化、品質管理など、たかが漬物とは思えないようなお話に、一同大変な感銘を受けました。

工業高校という特別な場所だけに、殊更有意義なお話であったと感謝しています。

工業界も日進月歩、生徒たちにも時には最先端の技術や、或は卒業後巣立つてゆく実社会の厳しさ等の話を、先輩の話として聞かせてやりたいと思っております。ぜひ、人物をご紹介下さい。



空手道部活動報告

元年総体出場

監督 井上日出男
コーチ 中野達也

この夏、本県で開催された元年総体空手道競技個人組手の部出場までの経過報告をさせていただきます。
まず、四月に行われた春季大会で二位となり、それまでは強化指定校四校の一つであったのが、最終段階の指定校二校の一つに選ばれました。これも、年二回の九州での大学生と合同合宿を行うなどの成果が少しずつ出てきたものと思われま



そして、総体出場を最終的に決定する五月の県体に望みました。

県体初日は、個人組手と型があり、須工からは組手に四名、型に四名エントリーしました。

型は、決勝に林が残りましたが六位に終わりました。組手では、ベスト16に大崎、ベスト8に林、下元が残ったのです。ベスト4に入ればインターハイ出場権ができるのですが、林はこの大会で優勝した明德

・広畑と善戦したものの六―三で破れました。一方下元は優勝候補の明德・三川と当りましたが、見事六―四で下しベスト4入りをし、準決勝でも明德・大下を六―三で破り、決勝進出をしたのですが、明德・広畑に負け二位となりました。

翌日の団体戦では、準決勝で山田高校に三―二で破れ団体でのインターハイ出場はなりませんでしたが、

それからは、総体に向けての猛練習が始まりました。出場できなかった他の部員たちも協力、応援し本当に良くやってくれたと思います。我がクラブの強さはこのチームワークにあるのです。

総体に出場した下元の戦績は、一回戦不戦勝。二回戦、岡山県代表を六―三、三回戦、神奈川県代表を六―四と進み、四回戦、これに勝てばベスト8という所で今大会シード選手の宮城県代表と当り、四―一六で破れインターハイ個人ベスト16でストップしてしまいました。

他の春からの成績は次の通りです。

- 四月 新人戦 個人三位
- 春季大会 個人三位
- 六月 夏季大会 個人一位・二位

九月 四国大会

秋季大会

団体二位
個人三位
個人三位

以上の通りです。
これからも須崎工業高校空手道部をよろしくお願
いします。



図書室

ヨット部の活動について

顧問 小松茂久
矢野修一

ヨット部再興2年目にして、インターハイ、国民体育大会に出場できたのは、周囲の皆様がたの多大なる協力と援助があったためです。誠にありがとうございました。この紙面をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。

ヨット競技は、御存知の様に自然の風、波、他の条件を味方にし、それらを、いかに有効に利用出来るかという競技です。例えば、シート（ロープ）一本を引く動作にしても、どの程度引くか、緩めるかタイミングはいつか？いま自分が行った動作は、回りの諸条件にうまく対応しているのかというチェックなど、シート一本にしても、莫大な情報と処理をくり返す集中力が必要ですが、1レース、2時間くらいかかる場合もありますので、集中力を持続させねばなりませんし、何本ものシート操作に加え、2人乗りであるため、体重移動を筆頭に全て2人のタイミングが少しずれると、ヨットは簡単に沈（転覆）してしまいます。ヨットは構造上絶対に沈む事は無いので、競技者は、練習中もライフジャケット（救命胴着）を着用していますので安全ですが、レース中に沈みますと、とり返すことができないロスタイムになってしまいます。

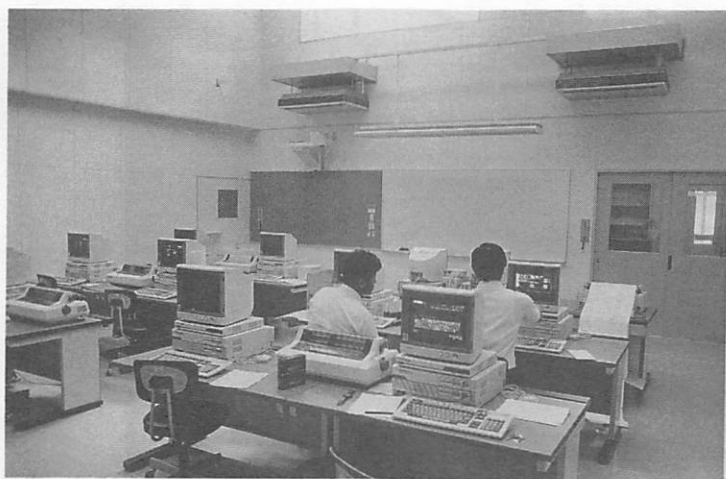
この様な風、波、他の条件についてですが、当然レースを行う場所により、これらの諸条件は異なります。つまりレースが行われるたびに、何らかの問題点は必ずあるもの、あるいは出てくるものだと思います。そしてこれらの問題点を、その都度解決していく力を養うには、やはり経験しかないと思われませんが、不幸にして、昨年の国体経験者は、現在2年生の1名しか残っておりませんでした。

そこで、小松茂久先生の指導のもと、ヨット関係者に協力援助を求め、土日祭日を返上し練習に明け暮れる日々が続きました。

インターハイへの出場が決まり、尚一層練習に熱が入りましたが、インターハイでの結果は惨敗でした。生徒たちもそうですが、私たちにとっても、大きなレース、レベルの高さで非常に勉強になったと思っています。

その後の国体にも出場しましたが、ヨットを国体開催地で借用する、チャーター艇により日頃乗り慣れている艇とは、全く異った艇であったのに加えて風、波の条件もちがう中でのレースでした。

スナイプ級44位、FJ級42位と奮う事が出来ませんでした。今後の大きな課題として残っております。わがヨット部は、高知県下の高等学校唯一の、ヨット部ですので、インターハイ、国体選手という自覚を、ややもすると失いかけて、ヨット競技に必要な精神力、集中力を欠く事になりかねませんが、他の方面の皆様のお力、御声援に助けられました。今後とも他のクラブ同様、皆様方のあたたかい御理解を、強くお願いして、近況報告と致します。



コンピュータ室

事務局だより

事務局長 辞任の(ごあいさつ)



昭和22年機械卒業
島崎 良一

秋となりましたが、気候不順で八月には例年になく雨が多く、台風の中から集中豪雨に各地が襲われ大きな被害が出ました。皆様の所はお変わりありませんでしたか、おうかがい致します。

さて私は事務局長として会員の方々とおつき合ひさせて頂きましたが、このたび理事会で辞意を認められて引退することになりました。長い間何かとご協力、ご厚誼を頂き有難うございました。

今ふりかえって見ると同窓会は浮き沈みが多く、活動も低迷気味で先の見込みも暗い状態でした。今の様に同窓会が強くなって来たのは喜ばしいことです。

昭和五十二年(一九七七年)より、清家寛氏を会長とする新しい役員で本部が発足し、その時事務局長のポストが置かれました。八月は会長ほか、母校教員、役員等で関東・中京・近畿(後に大阪・神戸・京滋と分れ独立する)の支部を訪問して、新しい本部役員改選のあいさつを兼ね、新しい事業(会報と名簿の発行)について、相談する会を持ちました。この他高知・須崎支部等でも同様の会が持たれました。この結果、同窓会事業に対して各支部のご理解

ご協力を頂くことにより事業の達成ができました。以上の経過の後、会報の第2号は発行されることになりました。原稿も母校の先生方をはじめ各支部、

職域、有志の方々より寄せられ、内容の豊かな記事掲載することが出来ました。これも会員の皆様のご協力のたまものと有難く思っています。それから第2号を読まれた方より会報に対する、ご意見、はげましも頂き次号発行の参考にもなり、目途がつかれました。前々から同窓会を発展させるには会報を発行する事が必要だと言われていましたが、よくわかりました。名簿もまた会長ほか役員や支部・職域の世話役等、多数の人々の非常なお骨折りでようやく発行に漕ぎつけるに至りました。

この様なことで会報も13号を発行しています。本部事務局は新たに武森幸利氏(M35卒)が、事務局長になられましたので、よろしく願ひします。そのほか若い方々が同窓会の事業を推進させるため努力されており、今後の同窓会の発展も明るく望み多いと期待しています。この新しい事務局の人々に会員の皆様方の、なお一層のご協力と、ご声援をお願い致します。

では会員の皆様、ご健勝にすごされますよう。色々お世話になりました。

(ごあいさつ)



昭和35年機械卒業
事務局長
武森 幸利

天候も不順な今頃です。会員の皆様方も益々御健勝のことと存じます。又、日頃は同窓会活動に御尽力、御援助をいただき厚くお礼申し上げます。会員の皆様の御理解のもとに事務局運営も円滑に進みつつあります。さて、この度、私ごとで失礼ではございますが事務局で皆様方のお世話をさせて頂いたことになりました。皆様方や役員の方々の御援助をお受けして微力ながらも同窓会発展のために努力をしたいと思っております。どうかよろしく願ひ申し上げます。

事務局と致しましては長年事務局長として同窓会のために貢献して下さった島崎良一先生に心より感謝を申し上げます。

去る五月二十七日には旧校舍跡に記念碑を建立し式典を行うことができました。これもひとえに十年に亘る長き懸案を完遂することができましたことは大きな喜びであります。記念碑建立実行委員の方々の御苦労に感謝を申し上げます。

皆様の御多幸をお祈りしております。



校地跡記念碑の 建立に際して

記念碑建立の話は、丁度十年前の本会報4号に、恩師、野中健一郎先生（昭和24〜33）からご寄稿いただいた「糺の故地に碑を残しておかれたら」の一文が発端になりました。（昭和54年）

その翌年の理事会では早速、現高知支部長の竹内良一氏（25M卒）からその話が提案されました。しかし、当時は中々資金源がなく、建立の方向で検討することにして一時お預けになりました。

その後は毎年のように理事会でこの話が出まして3年後に、建立委員会を作り、建立場所を管理している市役所との交渉などを行ってきましました。会報に記念碑建立の話が出始めたのもこの頃です。



記念碑建立祝賀会

同時に中平萬年先輩から、碑石の提供の話があり、一方では、「施工は私が引き受ける。お代はいらない」と笹岡勲・中平徳喜両先輩からの有難いお話や須崎市からの建立内諾も頂けたと言うことから、話が急に進み、事務局では島崎・西山両先生が清家会長、寺田須崎支部長と連絡を取りながら、経費・基本設計等の具体案を作成し、最終の委員会で建立案が了承されました。（昭和63年）

経費については、関西土木さんに、相当額を甘えさせていただいたと思います。

平成元年三月に工事着工後、順調に作業が進み、同年四月に完成。五月に竣工式を行い、資材の提供者及び工事関係者に感謝状と記念品を贈りました。

次に、建立委員会の委員及び、資材提供者等の氏名を記載し、そのご苦勞に感謝の意を表します。

事務局 記

建立委員会委員（敬称略）

相談役	宮地 恒雄	（前校長）
"	森岡 清	（校長）
"	森岡 峯雄	（教頭）
委員長	清家 寛	（会長）
委員	中平 萬年	（須崎）
"	矢野 亀雄	（"）
"	吉岡 豊延	（高知）
"	松本 興雄	（須崎）
"	笹岡 勲	（高知）
"	寺田 郁雄	（須崎）
"	中西 二郎	（須崎）
"	堅田 耕勇	（須崎）

建立関係者

坂本 臣三	（須崎）
竹内 良一	（高知）
下元 征夫	（須崎）
山地 健三	（須崎）
矢野 象一	（事務局）
島崎 良一	（事務局）
西山 庸一	（事務局）
碑石	中平萬年氏（18年M）提供
揮毫	森岡 清氏（26年M）校長
基本設計	竹内徳雄氏（23年M）提供
工事	西山庸一氏（48年S）事務局
コンクリート	笹岡 勲氏（21年M）含提供
工事	関西土木KK須崎支店
	中平徳喜氏（21年M）提供
	西村石材店（須崎市）



記念碑除幕式

昭和63年度決算報告書

目	金額(円)	備考
前年度繰越金	118,830	
収入金	456,000	228名*2,000円
特別会計利息	631,186	
雑収入	665	
預り金	5,000	S43小田切 暫夫
合計	1,211,681	
会議費	11,800	
出張費	16,000	
事業費	855,930	開校記念品代 57,000 会報印刷代 468,250 会報送料 314,680
通信交通費	155,380	
事務消耗品費	14,116	
雑費	333,720	
支那配分金	185,900	
雑費	32,340	
合計	1,589,186	
借入金	423,407	農協より
収入負債	出 支 出 残	
1,211,681+423,407-1,589,186=45,902		

<特別会計>

目	金額	備考
前年度末預立額	22,610,000	
本年度納入額	3,050,000	新卒(1,980,000) 旧卒(1,070,000)
合計	25,660,000	

監査報告

諸帳簿及び証券類等により監査の結果金額その他については相違なく、預金通帳・定期預金証券とも確實に管理適正に執行されている。

平成 元年6月05日

監査 坂本 臣三



2・平成元年度事業計画及び予算案の検討

平成元年度予算(案)

目	金額	備考
前年度繰越金	45,902	
人会金	482,000	2,000円*241名
特別会計利息	714,473	
雑収入	1,000	
特別会計より繰り入れ	2,100,000	771,000,000記念使用
合計	3,343,375	

会議費	金額	備考
開校記念品代	60,000	
会報印刷代	500,000	
会報送料	380,000	
振替用紙	13,000	
封筒	33,000	
調査費	34,000	
記念碑	1,000,000	
その他	10,000	
合計	30,000	
事業費	2,030,000	
通信交通費	250,000	切手代・通信料・他
事務消耗品費	40,000	コピー代・他
雑費	250,000	歓迎迎会・丸筒・他
支那配分金	201,500	関東193 中京146 近畿356 高知545 須崎725 幡多 50
雑費	20,000	
借入金	423,407	農協より
予算費	98,468	
合計	3,343,375	

平成元年度特別会計予算(案)

項目	金額	備考
累積預立額	25,660,000	
元年度納入予定額	1,800,000	
計	27,460,000	
50周年記念基金	2,000,000	4ヶ年預立
一般会計へ補助	2,100,000	記念碑等予算内へ
合計	4,100,000	
元年度末預立予定額	23,360,000	

終身会費納入者名 追加分

(63・10・11) (1・10・10)

どうもありがとうございました (敬称略)

特別会員

(前教頭先生)

竹村 義典

昭和十八年

箭野 憲正

昭和二十年

大崎 誠之

戸根 孝男

津野 広喜

昭和二十一年

永富 則雄

橋詰 則章

田村 雄助

矢野 文章

昭和二十二年

松本 勇

井上 忠男

昭和二十三年

山崎 節雄

辻 弘士

明神 愛輝

谷本 清生

昭和二十四年

小田 宏

中沢 栄

川崎 頼栄

昭和二十五年

武村 忠志

片岡 正明

立田 淳夫

昭和二十六年

高橋 善助

三浦 庸喜

昭和二十七年

松岡 直人

井上富士夫

前岡 和雄

邑岡 光男

昭和二十八年

小野 能秀

西岡 文男

本越 鑑

多田 拓郎

堀見 正

昭和二十九年

高山 三郎

松岡 洋祐

昭和三十一年

谷脇 富男

山本 秀夫

浜田 逸雄

昭和三十三年

竹林 信也

浜口 俊三

昭和三十四年

中村 六雄

坂出 映明

山本 正一

昭和三十五年

西田 聖夫

梶原 英男

山中 隆

北川 幹夫

昭和三十六年

榎並谷 大

窪田 恭治

力石 巖

中村 俊秀

吉村 征浩

前田 二郎

昭和三十七年

中井 博重

戸根 恒憲

松浦 博

山上征三郎

昭和三十八年

橋本 洋一

庄崎 郁男

古谷 幸三

秋沢 徳久

沖田 信一

昭和三十九年

安岡 憲一

昭和四十年

村田 良祐

西村 修英

下八川富繁

昭和四十一年

田村 茂男

田部 晴雄

福井 潤介

津野 安男

昭和四十二年

嶋崎 充温

松岡 勝幸

青木 文男

市原 芳政

池 正博

弘田 和幸

昭和四十三年

坂本 操

篠原 利清

小田切哲夫

中谷 博重

坂本 澄夫

昭和四十四年

堅田 英信

川上 進龍

久岡 昭雄

昭和四十六年

岡田 敏三

澤崎 速夫

松山 敦彦

昭和四十七年

坂本 則夫

昭和四十八年

中井 正純

昭和四十九年

小松 康夫

昭和五十一年

中村 敏男

昭和五十五年

芝田 真二

西森 政文

昭和五十六年

中村 卓

平成元年

朝日三智也

市川 浩

市原 守

市原 政和

井上 仁志

大崎 一志

大野 富男

岡崎 昭博

岡田 彦彦

岡村 章市

川上 敏広

笹岡 正道

澤元 隆志

土居真一郎

中川 浩之

中居 博

鍋島 真吾

野並 忍

西森 幹男

橋山 洋光

濱田 明

林 孝行

堀原 和則

堀池 龍児

真鍋 充史

村上 充史

森田 隆司

山本 浩司

山本 末広

吉本 洋明

池 俊宏

石黒 隆義

市川 淳

伊藤 宝人

植田 稔之

江崎 一昭

岡村 哲

武政 尚人

辻 英敏

津野 真男

寺村 政則

徳永 武志

富永 純一

鍋島 寿仁

西川 純一

西村 博延

古谷 光正

前田 健治

三宅 哲也

森 英也

安田 浪男

山岡 裕幸

山本 隆弘

吉井 政文

吉沢 保高

秋沢 裕一

市川 靖

井上 直純

大西 泰充

岡 雅人

尾中 真二

片岡 靖典

門屋 好宏

楠瀬 賢一

蔵下 武也

黒原 一彦

松本 敏宏

矢野 真吾

山崎 祐司

山崎 広昭

山下 克久

横山 憲也

吉村 欣也

出間 一尚

岩本 猛浩

海地登志夫

小川 純生

堅田 将仁

川上 淳英

川村 利二

川村 裕幸

國廣 謙二

坂野 俊彦

坂本 健文

岡田 雅幸

岡田 幸一

竹中 幸一

谷脇 晴夫

土居 裕

戸田 浩幸

戸田 正治

中居 祐二

中城 敏充

中山雄一郎

西村 司

岩崎 雅和

大賀 章司

大崎 和正

大崎 勝弘

大崎 信幸

岡村 博文

岡村 和則

河添 光章

河村 幸弘

川村 康彦

楠本 康彦

小寺 潔

小林 卓司

小松 正祐

小松 卓祐

笹岡 正司

白石 貴章

曾我本賢洋

田井 守

高橋 孝志

田口 勝一

竹下 一己

竹内 康充

関 祐典

竹下 明宏

竹中 輝幸

竹田 伸悟

竹林 義生

戸田 准一

岩本 伸二

氏原 政喜

太郎 聖人

大崎 邦広

大崎 健二

大崎 浩史

岡村 浩典

岡村 和昭

沖村 省一

堅田 滝一

堅田 博幸

劉谷 誠

北添 哲也

坂口 圭生

沢村 明宏

下元 祐典

下元 祐典

関 祐典

竹内 康充

竹下 明宏

竹田 輝幸

竹中 伸悟

竹林 義生

戸田 准一

中山 哲也

西田 健二

西森 路洋

林 就功

森田 浩生

岩崎 明

大崎 邦広

大崎 浩史

岡村 和昭

岡村 浩典

沖村 省一

堅田 滝一

堅田 博幸

劉谷 誠

北添 哲也

坂口 圭生

沢村 明宏

下元 祐典

下元 祐典

関 祐典

竹内 康充

竹下 明宏

竹田 輝幸

竹中 伸悟

竹林 義生

戸田 准一

中山 哲也

西田 健二

西森 路洋

林 就功

森田 浩生

森田 浩生

山崎 喜博

山崎 喜博

高知県立須崎工業高等学校同窓会会則

才一章総則

才一条 本会は高知県立須崎工業高等学校同窓会と称する。

才二条 本会は会員の親和、母校の隆盛を図るを目的とする。

才三条 本会は本部を母校に置き、正会員多数の地域（職域）に支部を置くことができる。

才二章事業

才四条 本会は才二条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 会報並に会員名簿の発行及び配布
- (2) 母校の発展に関すること
- (3) 会員の親和に関すること
- (4) その他目的達成のために必要なこと

才三章会員

才五条 本会の会員は次の者をもって組織する。

- 1、正会員
 - (1) 高知県立須崎工業学校を卒業した者
 - (2) 高知県立須崎工業高等学校併設中学校を卒業した者

(イ) 高知県立須崎工業高等学校を卒業した者
(ロ) (イ) に在籍した者で会長が推薦し理事
会として認められた者

2、準会員

高知県立須崎工業高等学校在校生

3、特別会員

才四章役員

才六条 本会に次の役員を置く

会長一名・副会長二名（内一名は本部事務局長を兼ねる）・会計一名・常任理事若干名・理事若干名・監事二名

才七条 役員は選出は次の通りとする。

(1) 会長、副会長、会計、監事は理事会において選出する。

(2) 理事は総会において選出された者および母校在職正会員とする。

(3) 常任理事は理事会で選出する。

(4) 会長は本会を代表しその運営を統括する。役員は本会を代表しその運営を統括する。

(5) 副会長は会長を補佐し会長事故あるときは、その職務を代行する。

(6) 事務局長は本部事務局を主宰し、本会の事業を執行する。

(7) 会計は本会財政の運営に関し、予算収支の企画および収支の執行に当る。

(8) 常任理事は本会の常務を執行する。
(9) 理事は本会の重要事項を審議する。
(10) 監事は本会の会計監査に当る。

才九条 本会に名譽会長を置き母校校長を推戴する。

才一〇条 会長が必要と認めるときは、理事会にはかり顧問および相談役を置くことができる。

才一二条 役員は任期は二ケ年とする。但し再任は妨げない。補欠のために就任した者の任期は前任者の残余期間とする。

才五章会議

才一二条 本会の会議は総会、理事会および常任理事会とする。

才一三条 総会は二年毎に開催し、必要に応じ臨時に開催する。

才一四条 総会は会長がこれを召集し、出席者の過半数で決定し、可否同数のときは議長が決定する。

才一五条 理事会は次の場合に開催する。

才一六条 理事会は総会に次ぐ決議機関で次の事項を決定する。

- (1) 本会の規約の作成変更および役員選出
- (2) 収支予算ならびに決算
- (3) 事業の計画およびその他重要な事項

才一七条 常任理事会は会務の迅速円滑な執行をはかるため、総会および理事会の決定にもとづき、直接業務に必要な事項を審議し実行する。常任理事会の決定および実施事項は理事会に報告し、承認を得なければならぬ。

才六章 事務局

才一八条 本部に事務局を置き、事務局長が統括する。

才一九条 事務局の構成は次の通りとする。

- 1、事務局長
 - 2、会 計
 - 3、母校在職正会員
- 才二〇条 事務局は総会、理事会、常任理事会の決定に基づき必要な会務を執行する。

才七章 会 計

才二条 本会の財政は会費、入会金、寄附金その他の収入によつてまかなう。

正会員は会費（終身会費）を納入しなければならぬ。

会費（終身会費）は一万円とする。

入会金は入学時二千円を納入するものとす。

才三条 本会の会計年度は四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

才三条 本会は会計年度末に支部に対する配分金額を理事会にて決定し、翌年度六月末までに還元する。

附 則

昭和二五年一月二〇日施行の本会則は、昭和四三年三月一日改正、昭和五一年八月一日改正、昭和五六年八月九日改正する。
昭和六二年六月二〇日改正。

各種証明書の発行について

(母校事務室からの伝言)

証明書が必要なときは、法令の定めにより証明書交付申請書別紙(用紙は事務室に備付)を校長宛提出しなければなりません。(第二号十八頁の様式)

申請書には必要事項記入のうえ押印し左記金額に相当する高知県収入証紙を貼付してください。遠隔地からの申込みは事務手続に相当の日数を要しますので早目に申込みをしてください。又県外には高知県収入証紙は販売していないので、切手、又は現金を同封してください。

なお返信用の封筒には切手の貼付、住所、氏名、郵便番号をお忘れなくご記入下さい。

手数料は次のとおりです。

卒業証明書	一通につき二〇〇円
成績証明書	一通につき二〇〇円
単位修得証明書	一通につき二〇〇円

送り先〒785須崎市多の郷和佐田甲四一六七ノ三

高知県立須崎工業高等学校事務室
電話(〇八八九)⑫一八六一

⑬一八六一

証明書の件につき不都合または不明な点等がありましたらいつでも右記電話番号の証明係までお電話ください。

編 集 後 記

第十四号の会報を、お送りいたします。

各支部の役員、並びに会員の皆様には、原稿をお願いいたしましたところ、心よく原稿を送っていただきありがとうございます。

紙面の都合上、終身会費納入者名を本年度のみとさせていただきます。申し訳ございませんが、ご了承下さいませ。

今後につきましては、良い記事がありましたら事務局まで、ぜひ直接お送り下さい。次の会報に載せたいと思います。

尚印刷につきましては、須崎市内の笹岡印刷所さんにお願ひし、大変お世話になりました。心から御礼申し上げます。

会員の皆様の御活躍をお祈り申し上げます。

事務局編集委員

古谷恭啓
梅原俊男

平成元年十二月一日発行

発行所 高知県立須崎工業高等学校

同窓会事務局

印刷所

高知県須崎市東古市町二番十六号
有限会社 笹岡印刷所